

保育者・幼児教育者養成におけるイメージを豊かにする表現指導 —詩がつなぐ絵画・歌唱表現—

芦田 風馬
田原 昌子

保育・幼児教育において、様々な活動を通して、子どもたちの豊かな感性や表現を養い、創造性を豊かにする実践力は、子どもたちの「生きる力」の基礎を育む教育に携わる者に求められる資質・能力の一つといえる。保育者・幼児教育者養成に携わる養成機関では、各領域で学びだけでなく、各領域が連携した学びを計画・実践することが、この資質・能力の養成において必要である。

本研究では、保育者・幼児教育者養成における表現領域の造形活動・音楽活動の連携指導の一つとして、保育・幼児教育の実践現場で歌われている子どもの歌の歌詞、「詩」に着目し、学習者がその「詩」のイメージをマインドマップで言語化して膨らませ、絵を描く・情景や心情を歌う表現における工夫を可視化する活動に取り組んだ。この取り組みが、学習者が「詩」に対する自己のイメージを昇華させ、表現の幅を広げるという体験を持ち、学習者自身の表現力・創造力を高めるものであることを検証する。

キーワード：詩、マインドマップ、絵画、歌唱、表現

With regard to care and education in early childhood, it can be said that the ability, through activity, to nourish children's rich sensitivity and expressiveness, and to enrich their creativity, is one of the qualities and capabilities required of anyone involved in the kind of education that nurtures the foundations for children's "zest for living". In training institutions, it is necessary not only to study field but plan to practise various field together for the development of quality and capability.

This study explores one method of cooperative instruction in musical and creative activities in training in nursery care and early childhood education. We take the lyrics of children's songs typically sung in nursery and early educational settings, and focus on the "poetry" of those songs. We then expand on and verbalize the images contained in that "poetry" using a mindmap, perhaps drawing a picture or scene, or singing about any resultant feelings and impressions, thereby revealing learners' expressive skills and abilities. In this way, learners refine their self-image with regard to "poetry", expand their range of expression, and can personally verify that their creativity has been heightened.

Key words : poetry, mindmap, drawing, singing, expression

はじめに

保育・幼児教育に携わる者にとって、『幼稚園教育要領』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』『保育所保育指針』¹⁾の理解と、実践指導力は必須

である。表現領域の造形・音楽においては、保育者・幼児教育者自身の実技の技術力が、保育・幼児教育に必要な理論の理解に加え、必要となる。その実技の技術力は、全国保育士養成協議会による保育士試験では、以下のように記されている。²⁾

〔①音楽に関する技術〕

幼児に歌って聴かせることを想定して、課題曲の両方を弾き歌いする。

求められる力：保育士として必要な歌、伴奏の技術、リズムなど、総合的に豊かな表現ができること

〔②造形に関する技術〕

保育の一場面を絵画で表現する。

求められる力：保育の状況をイメージした造形表現（情景・人物の描写や色使いなど）ができること。〕

これらの保育者・幼児教育者に求められる実技の技術力は、単なる絵画・演奏の技術力としてだけでなく、表現領域のねらいを、具体的な活動を通して、子どもたちの豊かな感性や表現を養い、創造性を豊かにするための保育者・幼児教育者自身に求められる資質・能力の一つといえる。

この保育者・幼児教育者の資質・能力は、子どもたちの「生きる力」の基礎を育む教育を行うために必要なものであり、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域の活動を個々に、あるいは、いくつかの領域のねらいや内容を組み合わせた活動の指導を可能にするものである。従って、保育者・幼児教育者養成に携わる養成校の表現領域指導担当者にとっても、表現領域の造形・音楽の個々の分野の指導だけでなく、分野の連携、さらには、5領域の指導との関わりを鑑みた指導を計画・実践することが必要である。

本研究では、保育者・幼児教育者養成の表現領域の造形活動・音楽活動の連携指導の一つとして、保育・幼児教育の表現領域で扱われる子どもの歌の歌詞、「詩」に着目し、学習者がその「詩」のイメージを膨らませ、そのイメージをマインドマップで言語化し、そのキーワードを基に、実際に絵に描き、歌うという取り組みを行った。この取り組みは、学習者の「詩」に対する自己のイメージを昇華させ、表現の幅を拡げ、学習者自身の表現力・創造力を高めることを検証するものである。

I 絵画と音楽をつなぐ表現

I-1 マインドマップについて

マインドマップとは Tony Buzan によって提唱された、アイデアを拡げるための思考方法である。その特徴³⁾はキーワードを記入し、そこから枝分かれ（ブランチ）するように関連するキーワードを放射条に拡げていく。こうしたマインドマップを利用することによって・要点への集中力が高まる・キーワードが目につく・マインドマップ作成中は新しい認識と発見が絶えず起こり、思考の流れが妨げることなく続くとされている。

I-2 造形と音楽

本研究では保育者・幼児教育者養成において、学習者の表現力を豊かにするための取り組みの一環として造形と音楽に焦点を当てて、その表現領域の横断的な授業実践を試みるものである。もともと造形と音楽という領域は前述の通り、表現や感性など共通するキーワードが多数存在するが、思ったことや感じたことなどを造形物として表現するのか、歌唱等で表現するのかという違いがある。こうした感性というキーワードのもと、造形と音楽を総合的に学習する取り組みとして、有川貴子⁴⁾は図画工作科の授業において音楽を取り込むことよっての表現活動の効果を報告している。喜怒哀楽という目には見えない心の動きをクレヨンで描画するにあたり、オルガンでそのテーマに合わせた曲を伴奏することでの描画の変化を考察する中で、発達段階における効果の差異を確認している。しかし、図画工作科の授業に音楽を関連させており1方向的な取り組みとなっていることがわかる。

こうした造形と音楽の総合的な学習のプログラムは、井上の研究⁵⁾によってその類型を示している。小学校における音楽科と図画工作科のつながりとしては、井上の研究の中で横断的な授業のプログラムを検討し、音楽と図画工作科の合科的指導としていくつかの類型を示している。その取り組みの中で音楽科においては音に対する創造性、図画工作科では色彩、形、技法を工夫する力の向上が見られたと明らかにしている。また井上の研

究では小学校の授業を対象としているが、他の校種での可能性も示唆されている。

上記の研究他にも造形と音楽をつなぐ取り組みを示した研究はいくつか報告されているが、これらの2つの領域をどういった手法によってつないでいるかが重要な鍵になると考える。そこで本研究は造形と音楽をつなぐものとして「詩」に着目をして授業実践を行い、絵画表現、歌唱表現でのイメージの関わりを考察するものとする。

I-3 「詩」と「絵画」

造形表現における「詩」の役割を考えると、そのことばからイメージした情景や思いを形として表すという取り組みが考えられる。例として挙げると書かれている「詩」に対して、その情景の一場面を想像した挿絵が描かれたものである。これは書物における挿絵や絵葉書などに表現されている。ウト・ビクトゥラ・ポエシス（詩は絵のごとく）という言葉は「絵画」と「詩」の関係は古くから密接であることを示しており画家の小澤基弘⁶⁾は詩画作品を多く残している星野富弘について次のように言及している。「優れた詩画は、詩と絵を別々に見て、『ああ素敵な絵だなあ』『とてもすばらしい詩だ』『だからこの詩画はすばらしい』というような継時的な見方から判断されるものではないというのが、私の持論である。優れた詩画作品は瞬時にそれとわかる。たとえ詩を読まずともわかるのである」

異なる領域のものをそれぞれ認識するというよりも、全体としていかに調和の取れたものに仕上がっているか。これは本研究で行う「造形」と音楽の連携指導においても、その調和性が重要になることを示唆していると言える。多くの場合は詩から発想を拡げて絵にするという流れが一般的ではあるが描いた作品（具象・抽象問わず）をもとに想像を膨らませて詩を書くという取り組みも行われている。また教育現場において考えるとお話を絵にするという活動は一般的であり小学校のなかでも取り組みやすいお題材となっている。ここでは詩とは少し離れる場合もあるが、読んだ本の中の一場面を想像しその登場人物や風景など思い浮かんだものを表現する活動は子どもにとっても、

様々なイメージを表出するための1題材だといえる。

I-4 「詩」と「歌唱」

「詩」は「音楽」、特に歌曲においては「歌詞」として切り離すことができないものであることはいうまでもない。柚木は『保育者を育てるための保育内容「音楽表現」第6章2節 保育の表現力⁷⁾で、「歌は、生活の中にあるさまざまな事象を歌詞で表しています。季節の一場面や年中行事、生活習慣、運動遊び、言葉遊び、ゲーム、夢、家族、友だち、日常生活の中のなんでもない出来事に感じる機微、そして子どものふとしたつぶやきなどで。このようなあらゆる事象が、つまり歌遊びによる保育が、『表現』という領域にとどまらず『健康』『人間関係』『環境』『言葉』の五領域すべてに通じて各領域をつなぐ役割を担っている」と、歌曲における「詩」の、広義での保育における「詩」の役割を述べている。

また、同氏は『実践しながら学ぶ子ども音楽表現⁸⁾で、歌唱表現のポイントを以下のように2点挙げている。

〔1) 歌に合った声色と表情

歌に合った声色と表情を見つけるうえで重要となるのは、歌の内容を把握することです。歌詞の内容から、その歌の場面や登場人物、またその登場人物の感情などを読み取り、それに相応しい声を見つけてみます。

(2) 語感を読み取り表現する

歌全体の内容をとらえたり、一つひとつの語感を読み取ったりし、それに合った声色・表情をすると、さらに表現の幅が広がります。」

このように、保育者・幼児教育者にとって、歌曲は、「歌詞」を「詩」として、その「詩」のもつ情景や情感のイメージを発声や発語に乗せ、さらにその歌声を支える伴奏の音量や音色の工夫をし、「詩」の世界観を総合的に表現する音楽である。小学校学習指導要領音楽科各学年の〔共通事項⁹⁾に挙げられている、「音楽をかたちづくっている要素 音色、リズム、速度、強弱、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズ」「音楽の仕組み 反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と

横の関係」を、その歌曲の楽譜から読み取ることが、「詩」への共感や理解を深めることに繋がる。

これらのことから、文字として表されている「詩」の世界を、楽譜に書かれている「音楽」によって呼び起こされたイメージや情感等を「歌唱」という方法を用いて自己表現することが、歌唱表現である。すなわち、①「歌詞」を「詩」の世界観としてイメージすること、②楽譜に書かれている「音楽」の情報から、「詩」の世界観をいかに作曲者が創意工夫して音で表そうとしているかを読み取り、自らの身体を楽器とする声で、自らの思いや意図に沿った表現すること、という2つの取り組みが、歌唱表現には必要となるのである。

I-5 「詩」から「絵画」「歌唱」表現への繋がりについて

これまでに筆者らが考える「詩」「絵画」「歌唱」についてそれぞれの関係性を示してきた。本研究で行う授業の取り組みでは「詩」を起点として各表現のイメージを拓げることには焦点を当てている。「詩」を読むことによって浮かび上がったイメージを「絵画」及び「歌唱」に表現を進め、さらに「絵画」と「歌唱」でのイメージの共有性を調査する。(図1 詩から絵画・歌唱への繋がり三角形)

II 保育者・幼児教育者養成におけるイメージを豊かにする表現指導

II-1 授業実践への経緯

A 大学保育士・幼稚園教諭養成課程 2020 年度保育内容V(音楽)後期の取り組みで、学習者が幼児の遊びを通じた歌う活動の学びのまとめとして、さらに、保育実習や幼稚園教育実習等で、子どもの冬の歌を子どもたちに歌って聞かせることを想定した設定保育として、各自が選曲した子どもの冬の歌の情景を「絵画」に描いて「歌唱」をするという活動を行った。対象年齢・取り上げる曲は、学習者が選択し、その歌に対していかなるイメージを持ち、その歌を通して子どもたちに何を伝えたいかを記述し、その歌を保育・幼児教育現場で教材として取り上げる意識の考察を行った。

その結果、「歌詞」として書かれている「詩」の

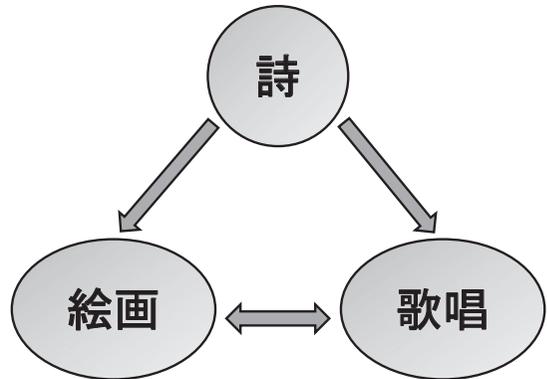


図1 詩から絵画・歌唱への繋がり三角形

情景・心情に対する学習者自身の持つイメージ(1-4で述べた①)や、用いられている音楽のリズム、旋律、音高、さらには様々な記号から読み取れる(1-4で述べた②)曲のイメージが「絵画」に表されると、固定化されイメージで描かれたと考えられる作品が多く見受けられた。学習者自身が、「詩」や「歌唱」から「音楽」を表現する経験、イメージしたものを「絵画」で表現してみるという経験が、過去にあまりなかったのではないかと考えられた。

このことから、幼児教育の表現領域でねらいとされている「(1)いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。(2)感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。(3)生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。」という経験を学習者自身が積むことが必要であり、造形分野と連携して、学習者がより豊かなイメージを持てるような授業実践の工夫を取り入れることにした。

II-2 授業実践の目的

- ・学習者が「詩」(子どもの歌の「歌詞」)から受ける情景や情感などをイメージし、それを、可視化するために言語化し、明確にする。
- ・学習者が言語化したイメージを実際に「絵画」に表すときに、どんな風に描いてみたいか、描いた絵を基に歌ってみるときに、どんな風に歌ってみたいかを記し、「絵画」「歌唱」で表現する体験を持つ。

なお、保育者・幼児教育者の音楽表現の指導力

は、弾き歌い伴奏力、すなわち、歌唱力と器楽等による伴奏の演奏力が必要とされるが、本研究では、伴奏による演奏力の差異で表現の差異が生じることを排除するため、学習者は歌唱のみで音楽表現することにした。

II-3 授業実践の対象

A 大学 2021 年度前期 保育内容（造形）・保育内容（音楽）の両科目を履修している学生 70 名

II-4 選択した「詩」（歌詞）について

A 大学では、保育実習を夏季・春季休暇中、幼稚園教育実習を夏季休暇中に行っているが、夏季の保育実習で実践した音楽表現活動の報告¹⁰⁾の〈歌う活動〉で、歌をみんなで一緒に歌う活動や、指遊び・手遊びや身体表現を伴った歌う活動が挙げられていた。それらの活動で、保育実習が実施された夏という季節を反映した歌が多く取り上げられ、その中でも、『アイスクリーム』、『アイスクリームのうた』¹¹⁾の2曲が、報告された曲のなかで多く歌われていたことが、同アンケートから明らかになった。

また、このアイスクリームに関連する2曲の一つである『アイスクリーム』が、2021年6月終わりから7月にかけて、筆者・芦田が指導する京都市S幼稚園の活動で歌われていたことから、歌曲『アイスクリーム』を取り上げることにした。

『アイスクリーム』は、保育者・幼児教育者養成の弾き歌い教材として使用頻度の高い『子どものうた200』¹²⁾の楽譜では、作詞：田中ナナ、作曲：岩河三郎、編曲：小林美実と記載されているが、『年齢別 12か月 子どものうた 154』¹³⁾の楽譜では、作詞・作曲不詳となっており、出典が明確でない部分がある。作詞者：田中ナナ¹⁴⁾は、日本放送協会専属ライターであり、子どものための歌の作詞者である。『田中ナナ童謡集 おかあさんなあに』¹⁵⁾では、田中の詩『アイスクリーム』は「アイスクリームがね ひるねして とけちゃったの」のみの極めてシンプルな「詩」であり、幼児教育現場で歌われている「歌詞」とは異なる。

しかしながら、わらべうたであるように、子どもの歌には作詞者や作曲者が明確でなく、民間で歌

い継がれてきたり、子どもの発達や地域の文化に合わせたり、時代の流れを反映したりして、歌詞、旋律、リズム等が変化する歌が少なくない。『アイスクリーム』は、田中ナナのシンプルな「詩」が子どもの心を捉え、変化しながら、保育・幼児教育現場で現在歌われている「歌詞」へ変化していった歌曲であると考えられる。

さらに、『アイスクリーム』の保育・幼児教育現場で歌われている「歌詞」は、固定化された登場人物・情景の描写が少なくシンプルであり、歌う人々のイメージを拡げ、各々の独自の表現の可能性があることから、幼児教育現場で歌われている歌曲の「歌詞」の持つイメージを、絵画・音楽の表現へと発展させる題材として、取り上げることとした。

本研究で扱う『アイスクリーム』の「詩」は、前掲書『こどものうた 200』より引用した以下の「詩」である。

<詩> アイスクリーム アイスクリーム
どこから どこから なめよかな
とけちゃうよ でも どこから
なめよかな

II-5 3段階の授業実践

第1段階 マインドマップから絵画表現する取り組み（2021年6月）

・第1段階-1 詩からイメージを拡げる・言語化する取り組み

～学習者が『アイスクリーム』の「詩」から読み取れる情景や心情などを絵画に表す活動～

学習者が絵に何を描くかを考える際に、具体的に“見えるもの”と“見えないもの”に分けながら考える必要があると考え、マインドマップで、歌詞から想像した情景・心情等をキーワードとして書き出し、そのキーワードからまた派生するような形で新たなキーワードを考えるという取り組みを行うこととした。

マインドマップを用いて、学習者自身の表現に合うキーワードをなるべく多く書き出し、そこからさらに前述の、“見えるもの”と“見えないもの”の領域に分類を行う取り組みをおこなった。例えば「詩」から連想できる目に見えるものとしてはア

アイスクリームというキーワードが具体的に出現しているが、他にもそれを持つ人物や、周りにある風景を想像することができる。また見えないものの例えとしては、登場人物の気持ちや気温、味などの視覚化されていないものなどが挙げられる。こうした学習者自身が思い浮かべるキーワードを起点として様々な情景を派生させながら発想を拡げていく取り組みとした。(図2 マインドマップを用いて発想を広げる)

・第1段階-2 「詩」のイメージを「絵画」にする
取り組み

～「詩」からイメージを広げて導き出したキーワードを基に絵画に表す活動～

“目に見える”領域のものは具体的に描画することが可能であるため、本実践では特に“目に見えない”表現をどう視覚化するかに焦点をあてることとした。(図3 絵画に見える化するための工夫)のプリントを使用して学習者自身が採用する目に見えない領域から導き出したキーワードを選び、どう絵画として見える化するか、を考える。「絵画」で表す際の条件としては4つ切り画用紙という設定のみにとどめる。表現方法は自由で、これまでに授業で取り扱ってきた技法などを応用しながら、学生個々の思いに合わせて表現をすすめることとした。そのため図3のプリントの中にあ

る見える化する工程において主に、どの色を使用するか、こういった技法を用いてその“見えないもの”を表現するのかを記述するようにした。

第2段階 『アイスクリーム』のイメージを「歌唱」として表現する取り組み (2021年7月)

・第2段階-1 「詩」のイメージを「歌詞」として表現する工夫

～第1段階の学びの経験を踏まえ、「歌詞」の情景や自分の思い等を文字で記載する活動～

『アイスクリーム』の「歌詞」では、「アイスクリーム アイスクリーム」「どこから どこから」という「歌詞」のリフレインから、学習者が第1段階-1でイメージした情景・心情を、また、「とけちゃうよ でも どこから」の「でも」という逆接の言葉が使用されていることで、先に歌われる「なめよかな」と、2回目の「なめよかな」という気持ちの違い等、「歌詞」への自分の思い等を文字で書き込み、「詩」のイメージを「歌詞」として表現する時の工夫を明確にした。(図4 イメージを歌詞に表す工夫)

・第2段階-2 旋律に「歌詞」を載せて「歌唱」(音楽)として表現する工夫

～「歌唱」する時にいかに歌いたいか、音楽表現についての工夫を文字で記載する活動～

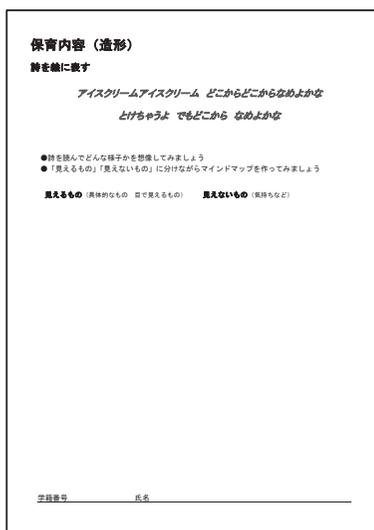


図2 マインドマップを用いて発想を広げる

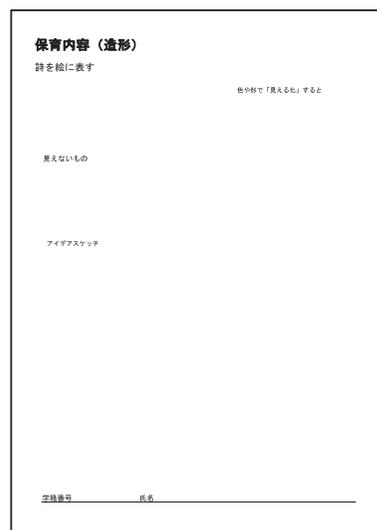


図3 絵画表現において絵画に見える化するための工夫

音楽表現において、先に述べた小学校学習指導要領に書かれている「音楽をかたちづくっている要素 音色、リズム、速度、強弱、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズ」「音楽の仕組み 反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横の関係」を楽曲から読み取り、それらを、表現に活かそうとする思いやテクニックが必要である。

歌を歌うとき、明るい・暗い声、優しい・荒い声等の声の調子や口調、表情などの工夫が、表現をより豊かにすることから、「絵画」や第2段階-1の学びで学習者が持った「歌詞」の世界を声で表現するために、学習者が上記の音楽の要素や仕組みを理解し、いかに「歌唱」したいかという思いや工夫を文字で書き込む取り組みを行った。

この歌曲の旋律は、「歌詞」を「詩」として音読したときの日本語のリズム、抑揚が、ほとんどそのまま音価やリズムで表されている。「詩」の言葉がリフレインされる部分で音高の変化をつけたり、「でも どこから」の部分にこの曲の音高の頂点があったりして、気持ちの高揚が音として表されている。学習者が、楽曲として曲の旋律をいかに読み込み、それをいかに「歌唱」に結び付けるかを、旋律に書き込むようにした。(図5 イメージを歌唱表現する工夫)

さらに、学習者がイメージした詩の世界を「歌唱」するには、歌詞の言葉を、他者が聞き取りやすく発音することが大切である。「歌詞」を子どもたちに語るように歌うために、歌唱法としての歌う姿勢や呼吸、発声法の工夫だけでなく、「歌詞」の日本語にある子音の特に「k」「s」「t」「h」を明瞭に発音することが必要である。学習者が、『アイス

クリーム』の「歌詞」の発音で、「歌詞」の「詩」を言葉として伝えるために、どのような工夫をするか、この点についても、図5に書き込むことにした。

第3段階 詩のイメージを「絵画」表現したものを基に「歌唱」表現し、一連の学びを考察する(2021年7月)

『アイスクリーム』の「詩」の世界を、「詩」の言葉から学習者各自がイメージし、それを「絵画」で表し、さらに、自ら歌ってみるという表現の取り組みの仕上げとして、子どもたちに各自が描いた絵を見せながら歌って聴かせることを想定し、実際に「歌唱」する取り組みを行った。歌われた音声・表情を記載して分析することには限界があるため、歌唱表現に対しての考察ではなく、マインドマップから「詩」の世界をイメージし、「絵画」を用いて「歌唱」する実践までの取り組みで、学習者自身が何を学んだかを考察してまとめ、この取り組みでの学びを確認した。

Ⅲ 結果と考察

Ⅲ-1 倫理的配慮

本研究の取り組みについて受講生にデータ収集の説明をして了承を得ており、また、本稿の執筆に当たっては、個人が特定できるような「絵画」・マインドマップ、楽譜や「歌詞」へ書き込みデータは掲載せず、テキストデータとしてキーワードのみを集約し、個人情報に配慮した。論文作成後に、収集したデータは全て破棄した。

2021年7月 保科内容V(音楽) 級 用 学籍番号 氏名

＜アイスクリーム＞

アイスクリーム アイスクリーム

どこから どこから なめよかな

とけちゃうよ でも どこから なめよかな

図4 イメージを歌詞に表す工夫

2021年7月 保科内容V(音楽) 級 用 学籍番号 氏名

田中ナナ 詞 / 岩河三郎 曲

アイスクリーム アイスクリーム どこからどこから なめよかな

とけちゃうよ でも ど こ か ら なめよかな

図5 イメージを歌唱表現する工夫

Ⅲ-2 結果の分析方法と結果

<分析方法>

- ・マインドマップに書かれた詩からのイメージを記載したキーワードをすべてピックアップし数値で示す。
- ・キーワードに出現した上位40ワードに焦点を当て、「絵画」に表現するときの“見えないもの”、「歌唱」に表現するときの“見えないもの”(工夫)を読み取り、考察する。

<結果>

(表1 総数1017ワードから分類した上位40ワード)に記載している。

Ⅲ-3 考察

40ワードのうち、「絵画」と「歌唱」で共通数が多いもの、絵画で多いもの、歌唱で多いものに分類し、考察を行った。

<「絵画」と「歌唱」の共通するイメージ>

この曲のタイトル『アイスクリーム』から、「アイス」がキーワードの共通するイメージとしてトップにあることは想像に易いといえる。

「うれしい」、「おいしい」、「楽しい」、「ドキドキ」、「ワクワク」、「幸せ」、「焦り」、「迷い」、「不安」¹⁶⁾がキーワードとして挙げられているが、前半6つのワードから、プラス(ポジティブ)なイメージ、後半3つのワードからマイナス(ネガティブ)なイメージを、この詩から学習者が持っていることが明らかである。

「絵画」と「歌唱」の表現をするにあたり、このイメージが共通しているものとして根底にあると考えられ、この共通のイメージは、この「詩」の持つ世界感を、学習者が共有しているといえる。この共有するイメージがあるということは、この「詩」を読む人が共通してもった体験が過去にあり、子どもを対象にした「詩」では、特に、共有経験があるということが、子どもたちに受け入れられる「詩」であると考えられる。

図1では「詩」を読むことでイメージを拡張、「絵画」、「歌唱」に表現する際の経路として示してきた。本実践での結果から見えたことは、「絵画」、「歌唱」において、前述の共通イメージを持って

表1 総数1017ワードから分類した上位40ワード

キーワード	マインドマップ	絵画での見える化	歌唱表現の工夫
アイス	63		26
冷たい	60	37	5
溶ける	45	6	36
暑い	43		14
子ども	42		
うれしい	41	33	27
甘い	38	18	5
美味しい	36	13	16
夏	36	16	5
コーン	34		
ソフトクリーム	23		
焦り	21	9	23
太陽	18		5
バニラ	15		1
チョコ	14		1
楽しい	13	9	10
迷い	11	4	30
白	11		
早くしないと	10	2	12

ニコニコ(笑顔)	10		
カップ	10		
どこから舐めよう	10		19
ワクワク	9	7	16
不安	9	7	3
氷	9		
カラフル	9		
スプーン	8		
頭がキーン	8		
女の子	8		
麦わら帽子	8		
ベトベト	7	3	1
海	7		
31	7		
涼しい	6	3	
落ちそう 落とす	6		
男の子	5		
汗をかく	5		
幸せ	5	5	1
ドキドキ	5	4	4
歯 しみる	5	2	

ることが明らかとなった。「詩」を読むことで自身の体験と照らし合わされる「うれしい」、「楽しい」などの根底となるイメージをもとに、各表現へと向かう一方で、「詩」から得られたイメージは「絵画」のみに反映されるもの、「歌唱」のみに反映されるものという経路の確認から図6を示すことができた。(図6 詩から共通イメージ・絵画のイメージ・歌唱のイメージの関係)

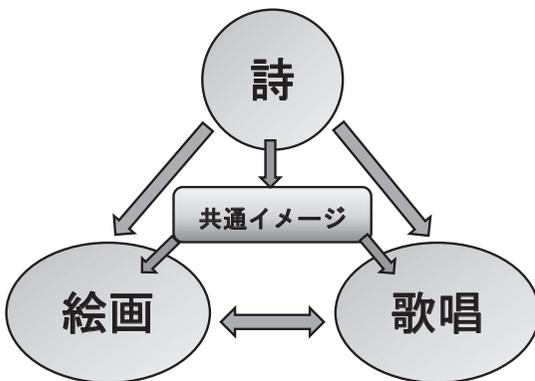


図6 詩から共通イメージ・絵画のイメージ・歌唱のイメージの関係

<絵画に多いイメージ>

「冷たい」「甘い」「夏」のワードが多く、このワードから人間の5感をイメージとして挙げ、それを絵画に表現するときの根底にあると、この詩から読み取ることができる。例えば、温度に関することで、色彩表現として、温かさ、冷たさが表現しやすいこといえる。さらに、絵画表現では、見えないもの(例「とける」)の表現を、具体的な見えるもの(例 太陽)を描写することによって、1枚の画用紙に表現することが可能である。また、具体的に描いた人物等の表情に、これらのワードからイメージしたものを表すことができ、“見えるもの”と“見えないもの”を組み合わせることで表現できることが絵画の特性であるといえる。

<歌唱に多いイメージ>

「歌唱」では、歌詞・旋律の両方からイメージを持ち、それを自分の声で表現することが前提ではあるが、今回は、「詩」から得たイメージを、「歌詞」としていかに表現するかという書き込みワー

ドを分析対象とした。

「とける」「焦る」「迷う」「悩む」のワードが多く、「とける」以外は、すべて抽象的な心情を表現するワードである。これは、声の調子や口調、表情などの工夫が、表現をより豊かにするものであることや、より音楽が“目に見えない”情感を表現することができる特性を持っていることによるものであるといえる。

また、「どこから どこから」の部分では、8分音符が連続して使用され、「タタタタ タタタタ」という言葉の持つリズムがそのまま表されていることから、たたみかけるような「焦る」イメージが表現されたり、最後の「どこから」の「ど」では、曲全体の中で1番長い音価(音符や休符の長さのこと)の付点4分音符「.」で記譜されたりし、「迷う」「悩む」イメージが表現されたりしていることがわかる。これらのことから、「歌詞」を「詩」として読むときの言葉のもつリズムや音価、さらにフレーズの取り方などが、旋律のリズムや音価とも対応し、より明確に心情を表すワードとして挙がっていると推測される。

おわりに

キーワードの中で具象化されたものは「絵画」で、抽象的な心情などは、「絵画」、特に「歌唱」で多い割合で挙げられていることから、学習者が、美術・音楽という目に見える芸術・目に見えないという芸術というそれぞれの芸術分野の特性を、表現に見える化する、表現を工夫する、ことで、自身の学びとして経験したと考えられる。

これらのことから、「詩」という文学表現の叙事的な、あるいは抒情的な叙述から、目に見える絵画・目に見えない音楽「歌唱」という異なる表現へイメージを拡げる場合、「絵画」と「歌唱」の相互で共有するイメージ、またそれぞれ独自のイメージから表現へという図6に表した繋がりがあり、表現の可能性の多様性が存在することが検証されたといえる。

保育者・幼児教育者養成におけるイメージを豊かにする表現指導で、造形と音楽のそれぞれの表現指導だけでなく、「詩」と「絵画」と「歌唱」の

イメージをつなぎ、相互で共有するイメージが根幹にあることから、今後も「絵画」と「歌唱」だけでなく、造形と音楽の分野で協同して指導し、学習者の感性を豊かにする必要性を再認識するに至った。

今回の分析では、キーワードになる言葉の分析のみであったが、個々の絵画作品としての表現や、歌声という歌唱表現での工夫についての分析を継続することで、表現指導の在り方について検討することが必要である。表現をするということは、イメージを持って表現するだけでなく、「絵画」「歌唱」で表現するための知識・技術等総合的に表現したものが本来の表現である。したがって、分析の視点を変えることで、保育者・幼児教育者養成における表現指導の方法が見いだされる可能性がある。

感覚や創造力を横断的に学習する取り組みは、近年の初等教育においても重要視されつつある。今回の取り組みは保育者保育者・幼児教育者養成を対象に行なったが、接続する、初等教育においても大いにその効果が期待されると考えられる。今後は校種を縦断的に、領域や教科を横断的に、学びを深めていけるような取り組みを展開していきたい。

(文献)

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領<平成29年告示>』、内閣府 文部科学省告示第1号 厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領<平成29年告示>』、厚生労働省告示第117号『保育所保育指針<平成29年告示>』
- 2) 一般社団法人全国保育士養成協議会『令和3年保育士試験受験申請の手引き 後期用』P23
- 3) Tony Buzan『ザ マインドマップ』ダイヤモンド社

2005

- 4) 有川貴子「『感性』でつなぐ芸術教科の合科的指導:図画工作科の抽象表現における、音楽による手立ての効果」静岡大学教育実践総合センター紀要 2021 pp.437-446
- 5) 井上朋子「音楽教育実践ジャーナル」vol.8 no.2 2011 pp.54-61
- 6) 小澤基弘「詩は絵のごとく絵は詩のごとく」富弘美術館 . <https://www.city.midori.gunma.jp/www/contents/1484179687418/index.html> (2021.9.1)
- 7) 石井玲子編著『保育者を育てるための保育内容「音楽表現」第6章 2節 柚木たまみ 教育情報出版 2020 P67
- 8) 石井玲子『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』保育出版社 2014 pp161-162
- 9) 文部科学省『小学校学習指導要領 第6節 音楽 第3指導計画の作成と内容の取扱い』平成29年告示
- 10) 田原昌子「2018年度保育実習Ⅰ巡回報告と保育内容「表現」の音楽表現活動報告に関する一考察」『児童福祉学研究第2巻第1号』児童福祉学研究会編集部 2018 pp51-61
- 11) 佐藤義美作詞 服部公一作曲
- 12) 小林美実編『子どものうた200』チャイルド本社 2009
- 13) 編曲 矢田部宏『年齢別 12か月 子どものうた 154』ひかりのくに株式会社 2013
- 14) 東京に生まれる。成城学園小学部卒業。その卒業記念として創作集『金の風車』(金の星社)を出版。日本女子大学国文学科卒。日本放送協会の専属ライターとして、放送台本執筆にたずさわる。雑誌・レコード・CDほかに詩・童謡を発表。日本児童文学者協会・日本童謡協会・詩と音楽の会に所属。本情報は、田中ナナ『子ども 詩のポケット25 おかあさん なあに 田中ナナ童謡集』株式会社てらいんく 2007 奥付より引用。
- 15) 前掲書 田中ナナ 2007 P40
- 16) 「不安」は、上位40ワードではないが、歌唱で「悩む」が下位のワードのなかで突出して多いため抽出